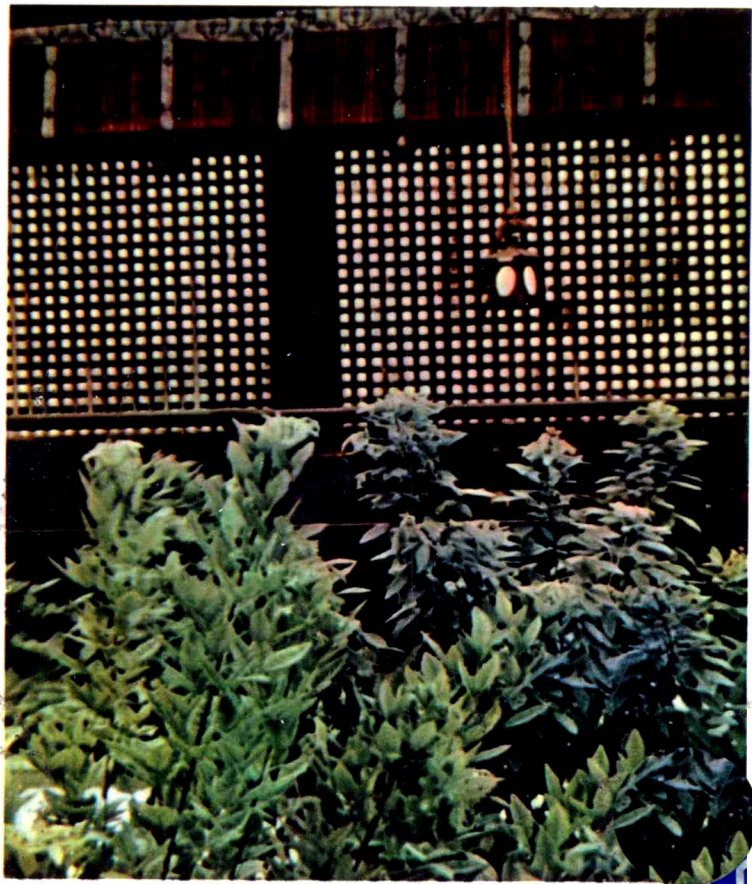


古典文学散歩

日本のふるさと

涌田 佑



kokosei shinsho

涌田 佑
わく た ゆう

1928年 横浜市に生まれる

著書 『人形村のこどもたち』(毎日新聞社)
『ある遣唐日記』(毎日新聞社)
『高校生文学散歩』(高校生新書)他

現在 日本児童文学者協会会員
神奈川県立茅ヶ崎北陵高等学校教諭

現住所 神奈川県高座郡海老名町今里 214 番地

古典文学散歩

定価 230 円

1967 年 2 月 6 日 第 1 版発行

著者 © 涌田 佑
1967 年

発行者 竹村 一

印刷所 同興印刷株式会社

製本所 山本製本所

発行所 株式会社 三一書房

東京都千代田区神田駿河台 2 の 9

電話 東京 (291) 3 1 3 1 ~ 5 番

振替 東京 8 4 1 6 0 番

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

高校生新書 70

涌田 佑著

古典文学散步



高校生新書

三一書房

古典文学散步
目次

I 大和路の四季の味わい——古きみ寺の文学散歩 7

春の斑鳩の里——初夏の唐招提寺——ゆく秋の大和の国の薬師寺の
……—冬の旅、早春の旅——雪の長谷、室生

II 倭建命の東征を追う——焼津・走水・足柄峠・能煩野 33

末路は悲しい英雄伝説——東征最初の難——数か所の火攻めの伝説
地——走水の弟橘比売——足柄峠に立つ——足柄峠の文学——甲斐
酒折の宮——信濃路古道——わが足当芸当芸しく……—養老孝子
伝説の遺跡——能煩野の国偲び歌

III “万葉”の若き人びとの悲歌^{エレジー}——近江・飛鳥・吉野・紀州路 59

有間皇子の悲劇——近江大津への遷都——香具山は畝火を
愛しと……—吉野の大海人皇子——悲劇の帝弘文天皇——
——廃都を歌う柿本人麿——吉野離宮をたたえる赤人——当
麻路の悲歌

IV “平家物語”を彩る女性たち——洛西嵯峨野・洛北大原の遺跡 85

無常観の象徴娑羅双樹——嵯峨野の祇王寺——源氏の挙兵

——想夫恋の曲——横笛と滝口入道——大原にこもる建礼
門院——因果はめぐる小車

V
あかるく悲しい曾我物語の舞台——伊豆・曾我の里・大磯・富士の裾野 107

東伊豆と伊東一族——曾我の里の幼い兄弟——兄弟の元服
と虎御前の登場——草の別れ、人の別れ——巻狩の地は伝
説の宝庫——音止の滝の伝説——討入り絵巻——その後の
虎御前——曾我城前寺を訪ねて

VI
芸術一途の芭蕉の旅——伊賀上野・奥の細道・大阪御堂筋 135

俳聖の故郷伊賀上野——江戸深川の芭蕉庵——奥の細道の
旅へ江戸出立・仙台から松島へ・兵どもの夢のあと平泉・
奥路横断・北陸路を行く・奥の細道結びの地——旅に病
む大阪御堂筋——蕉門散歩

VII
京都に伝統の美をさぐる——名園の文学散歩 173

京都は名園の宝庫——石川丈山の詩仙堂——大原の三千院
——ブルーノ・タウトの名著を手に——苔美しい西芳寺——

——等持院から仁和寺へ——嵯峨のはしら松明

甘露寺と阿部仲麿 30

鎌倉と万葉集 82

大磯の鳴立つ沢 104

柏原（信州）の小林一茶 130

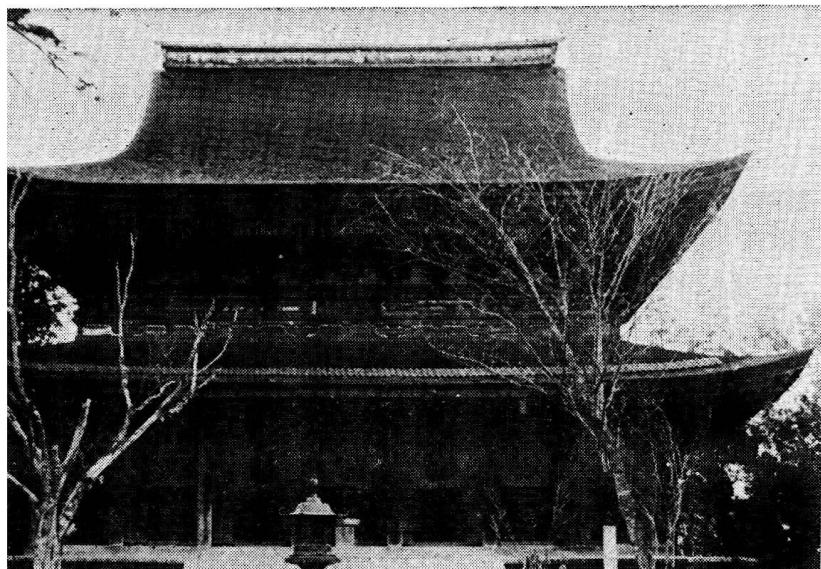
お初天神 169

嵯峨野と源氏物語 196

I 大和路の四季の味わい

——古きみ寺の文学散歩

吉野蔵王堂。元弘三年幕府との争いの時、村上義光は護良親王の身代わりとなってここで散ったと太平記は伝える。“歌書よりも軍書にかなし吉野山”とは蕉門十哲の一人各務支考の名吟である。



春の斑鳩の里

私は本書で古典の風土を語りつつ、あわせて伝統や文化ということの片鱗にも触れていきたいと考えている。若いみなさんにしみじみとした日本のよさを、ほのぼのとした日本の暖かさをわかってもらいたいと考えている。そしてそんな時、私は奈良のことから語り出すのがいちばんいいと思っている。では諸君、しばらくの間目を閉じていてくれ給え。——そして間もなく目をひらく。ほら、もう諸君はうらかな大和盆地のまん中に立ちつくしているではないか。そこでまずのどかな春光を浴びつつ訪れたいのが名刹法隆寺を擁する斑鳩いかるがの里である。そしてこのとき、伴侶として携えたいのが高浜虚子の「斑鳩物語」。

この作品は短いものではあるが、陽光みなぎるこの里の風物を特有の写生文で描いていきいきと心に迫るものがある。

作中の主人公が宿ったのは、法隆寺夢殿の南門の前にある一軒の宿であった。

この座敷のすぐ下から菜の花が咲き続いて居る。さうして菜の花許りばかりでは無く其と点接して梨子なしの棚がある。其梨子も今は花盛りだ。黄色い菜の花が織物の地で、白い梨子の花は高く浮織りうきおりになつてゐるやうだ。(中略)法隆寺はなつかしい御寺みでである。法隆寺の宿はなつかしい宿である。併しかし其宿の眺望がこんなに善からうとは想像しなかった。これは意外の獲物である。(斑鳩物語)

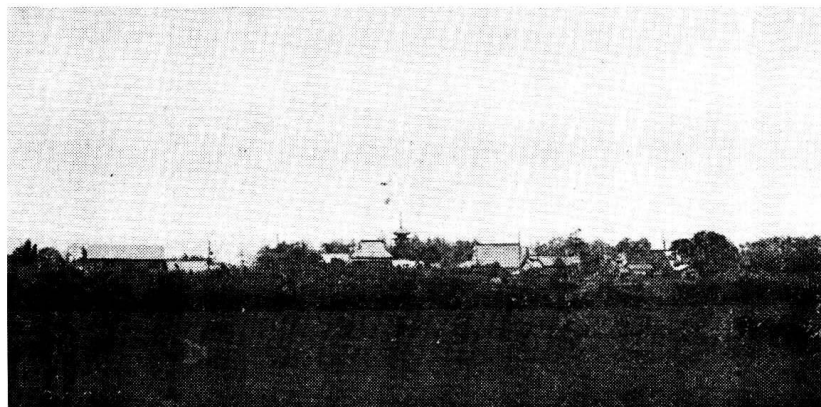
とは、この里の春昼の景である。遠景にはさらに三輪山、多武峰、畝火の山なども入ってくる。

「斑鳩物語」は、そうした里の叙景の中に、艶やかな一つの恋を綴るのである。それは法起寺の若い僧と里の娘の恋であった。主人公は法起寺の三重の塔の上からその語らいをのぞき見るというのどかさなのである。

いつのことであつたらうか、筆者もこの小説と同じような霧囲気の宿に泊って、月夜の景をもたのしんでみたことがある。月の夜の斑鳩の里も雄大でよかった。わけでも西方に黒々と浮く金剛（左手）と生駒（右手）の山脈のたたずまいはすばらしく、その二つがぶつかるところはちょっと凹んでいる。生駒山脈のうちでも二つのこぶが並んだように高く見えるところが信貴山であり、山頂近くに国民宿舎のあかりが幾つもあったいてみえ、夜半の月はゆっくりとそのあたりに沈んでいった記憶がある。

法隆寺への参詣は、法隆寺駅からのバスの停留所のある南大門から入るのがふつうである。美しい松並木の参

法隆寺の堂塔静かにうかぶ斑鳩の里の風景



道を行くと、西院伽藍の中門にぶつかる。中門から左右に回廊がのび、その中に金堂と五重の塔が横に並び、さらにその奥に大講堂がある。

中門や回廊の屋根をささえる太柱は、唐招提寺金堂の円柱におとらず雄大で人をひきつける。金堂内部の壇上には、中央部の釈迦三尊（聖徳太子のために造られたもので飛鳥時代の有名な仏師止利の作、金銅造り）、東には薬師像、西には阿弥陀像が安置される。またこの金堂内部に有名な壁画があつたのであるが、昭和二十四年の火災で傷ついたのでいまは別に保存されている。法隆寺の五重の塔は、見上げるとしばらくは身動きもできないほどに美しい塔である。一層から五層までが十、九、八、七、六の割り合いで小さくなっていくというみごとな釣り合い、全長の三分の一を占めるといふすんなりのびた相輪、そのほか細かいところに飛鳥建築の特徴を持ち、斑鳩の空高くそびえ立っているのである。そうした塔や金堂を囲んで敷きつめられた白砂と緑濃く姿美しい老松の幹や枝。まこと西院伽藍は飛鳥文化の粹であるといえる。心をこめ、たつぷりと時間をかけて味わいたい。

さて、その西院伽藍の見学を終えたら回廊の外へ出る。そこに鏡池という小さい池がある。そのほとりに、正岡子規の有名な句碑が建つ。

法隆寺の茶店に憩ひて

柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺

子規

茶店で子規は思いつきに柿を求めたのではなく、子規にとって柿は前々からの大好物であったのである。秋ならば斑鳩の里はあちこちに赤い柿の実が熟れているのを見るが、子規の食したのもそんな風物詩の中の一つであったのだろう。

池のほとりをめぐりながら子規をしのんだならば大宝蔵殿をめざす。ここの見学は法隆寺の中でも庄巻である。

夢殿観音（白鳳仏）、百済観音（飛鳥仏）、飛天の金堂の壁画、玉虫の厨子等数多くの国宝級の美術品に目のあたりに接することができる。ここも西院伽藍と同様ぜひ時間をかけてゆっくりと見学したいものである。

さて次は東大門をくぐって広い参道の小砂利をふみつつ東院伽藍を目ざそう。すぐに夢殿の、あの美しい屋根が見えてくる。

我々は後章において日本の精神の伝統の上に培

飛鳥建築の粹法隆寺の西院伽藍



われたという京都桂離宮の美しさにについて触れるが、それと夢殿を比較して美術の専攻学者は次のようにいうのである。「日本の木造建築は、や

がて中世以降になると、自然

木のままを使用した、いわゆる茶室建築の様式を生むに至る。それは木造建築の行きつく窮極的な美を別の規準から達成したもので、そこでは材料と機能の渾一した創造が成就されたわけである。私たちは、その高度な表現を桂離宮等に見ることができるが、しかもなお、美の純粹と高さということを考えるとき、夢殿を推さねばならなくなるのではあるまいかと思っている」。(岡田清「奈良の美術をたずねて」大阪創元社刊)

独創的な八角堂の夢殿。聖徳太子が生前に瞑想されたという八想の室になぞらえて建てられたというが、屋根の中央の擬宝珠からゆるやかに流れ下ってくる八本の稜線の程よき反り具合。それを受ける八つの平面のまことに簡素で重厚なまとめ方。夢殿の創建者といわれる僧行信の審美眼はかくも確かであったのである。

夢殿本尊の救世観音は、聖徳太子の等身像であるという伝説があるくらいで、かすかに笑みをたたえたいわゆるアルカイックスマイルの柔和な御相の飛鳥仏であり、これは明治十五年に

正岡子規の句碑



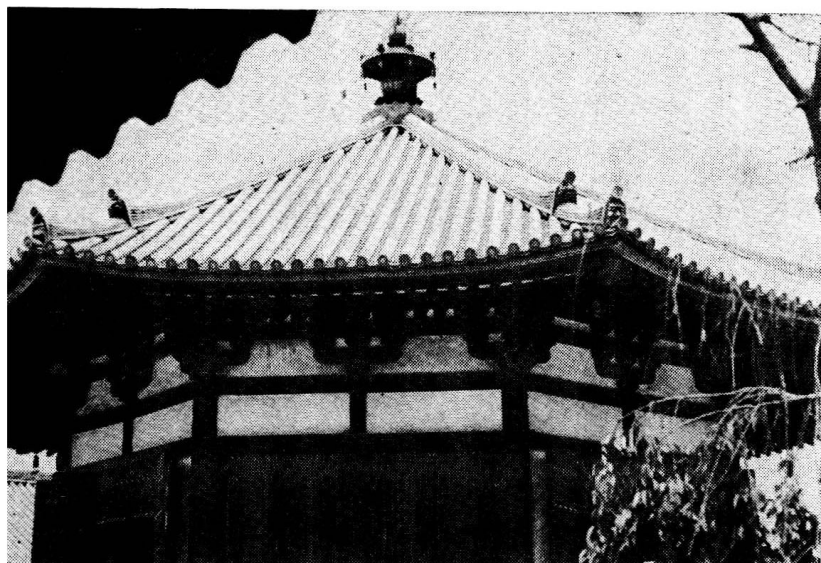
岡倉天心とフェノロサによって初めて公開された秘仏であった。現在でも、春（四月十一日から二十五日間）秋（十月二十二日から十三日間）の二期に限って公開されるのである。

この東院伽藍一帯の地は、もと聖徳太子の居所「斑鳩の宮」のあったところだが、太子の没後、六四三年十一月、その子の山背大兄王ら一族は非道の蘇我入鹿に攻められたが、そのとき、まこと仏の心を心としていた王は戦火を広げること avoidance、斑鳩の宮中で静かに自害し果てたのであったと知れば、このあたりの散策にもふと悲しい思いが湧くのである。

初夏の唐招提寺

若葉の候には奈良西の京唐招提寺を訪れてみよう。若葉が雄大な堂宇に映えて美しい。そしてできるなら六月六日に訪れるのがいい。というのは、

救世観音像をおさめる夢殿の美しい姿



この日が唐招提寺の開山忌で、境内の一角にある開山堂の扉がひらかれ、肖像芸術の名品といわれる盲目の唐僧鑑真和上の乾漆像が公開されるからである。

開山堂への入り口には芭蕉の句碑が建っている。

若葉して御目の雪拭はばや

芭蕉

いうまでもなく鑑真は奈良時代、聖武天皇の招きに応じて来日した唐僧である。

天皇は特に仏教を信ずる心深く、都をはじめ各地に多くの寺を建てたが、当時の日本には僧侶の正しい戒律が行なわれていなかったのも、何とかして高僧の多い中国から戒律の師を求めたいと考え、普照、栄叡という二人の使いの僧を遣唐船へ乗せて中国へ派遣したのであった。

大命を受けた普照らははるばると海を越え、洛陽や長安の寺々を訪ね歩いたが、なかなか来日を承知してくれる高僧がない。そのうちに二人は、南方の揚州というところに鑑真という高僧のいることを知り、これを訪ねて懇願すると、鑑真は快く日本へ渡ることを承諾してくれたのであった。しかし、それからが大変であった。日本めざして漕ぎ出した鑑真の船は途中嵐にあつて難破し、中国へ吹き戻されてしまったのである。しかしながら来日して正しい戒律を広めたという鑑真の決意はかたく、それからさらに数回の失敗にもめげず、最初の決意から十二年もの後の天平勝宝六年（七五四）、やっと日本に着くことを得たのであった。さすがの鑑真も潮

風のために目をすっかり痛め、とうとう盲目となってしまったのである。

聖武上皇や次代の孝謙天皇はこの高僧を迎えて東大寺に戒壇院を建て多くの僧に正しい戒律を授けたのであった。その、帝の志を受けた鑑真は、天平宝字三年（七五九）、平城京右京五条二坊の地に大寺を建て、これを唐招提寺と呼んだのであった。

同七年（七六三）、七十六歳の天

寿を完うして鑑真が亡くなってからも、思託、如法らのすぐれた弟子たちによって受けつがれたこの寺へは、多くのすぐれた僧たちが参集し、戒律をはじめ仏教の諸学を深める道場としてにぎわい、鑑真の意志は永遠に生きることとなるのである。

当時の唐招提寺に、講堂、金堂、食堂などの他に寄宿舎に当たる僧房などが多く見られたのは、そうした学問の道場としてこの寺が栄

開山堂の前にある芭蕉句碑

